

CAP2018

CAP2018 総括

～参加者・発表者・プログラム～

矢治健太郎（杉並区立済美教育センター／国立天文台）

1. はじめに

天文教育 2018 年 5 月号で、CAP2018 の速報記事を寄稿させていただいた[1]。こちらは、思いつくままざっくりと書いたこともあり、今回の特集号では、参加国・参加者数、またプログラムの面からデータの振り返る。なお、多少速報記事と内容が重複している点をご容赦いただきたい。

2. 参加国・参加者数

CAP は 2005 年に、初めてドイツ・ミュンヘンで開催されて以来、福岡での CAP2018 で 7 回目を迎えた。CAP2018 は「史上最大の天文系コミュニケーション会議」と評されるほど、大盛況のうちに終了することができた[2]。参加国・参加者数の数字はすでにいろいろなところで紹介されているが、過去の数字と比較してみる。

表 1 は CAP2010 以降の参加国・参加者の数の推移である。CAP2010 は、ヨーロッパ・アフリカからの参加国が多かったこと。また、世界天文年直後ということもあり、49 の参加国があった。CAP2018 では、アジアからの参加国が増加し、参加国数でも参加者数でも史上最大の数字となった。

表 2 は、前回の CAP2016 と CAP2018 を比較した。CAP2016 は南米コロンビアでの開催ということもあり、アジアからの参加は日本を含めても 2 カ国だけだった。ところが、CAP2018 ではアジアからの参加は 11 カ国に増え、参加者も 256 名。そのうち日本から 198 名が参加した。これは一つの国から

の参加者数という意味でも過去最高である。天文教育普及研究会からは 52 名が参加した。

表 1 CAP2010 以降の参加国・参加者数

	参加国	参加者数
CAP2010	49	155
CAP2011	18	52
CAP2013	40	206
CAP2016	22	140
CAP2018	53	446

表 2 CAP2016/2018 の参加者数の比較

	CAP2016	CAP2018
開催国	コロンビア	日本
開催都市	メデジン	福岡
参加国	22	53
(アジア)	2	11
参加者	140	446
(アジア)	11	256
(日本)	9	198
発表数	147	305

3. 開催テーマ

CAP2018 では、以下の開催テーマと 6 つのサブテーマが設定された。

開催テーマ

Communicating Astronomy in Today's World: Purpose & Methods

「今日の世界で天文学を伝える目的と方法」

サブテーマ

○天文コミュニケーションの課題

Current Challenges in Astronomy
Communication

○天文コミュニケーションの実践例

Best Practices in Public Outreach

○障がい者とマイノリティと共に楽しむ天
文学

Inclusion, Diversity, Equity and Empathy
in Communicating Astronomy

○よりよい世界を目指す天文コミュニケー
ション

Astronomy Communication for a Better
World

○天文コミュニケーションにおけるメディ
アの役割

Media's Role in Astronomy
Communication

○天文学の公衆関与における先端技術の活
用—マルチメディア・SNS・没入体験—

Using Multimedia, Social Media,
Immersive Environments and other
Technologies for Public Engagement with
Astronomy

4. プログラム概要

5 日間のプログラムの概要を表 3 に示す。
細かい時間は省いたが、概ね、午前のセッシ
ョンが 10 時から 13 時、午後は 13 時から
18 時である。また、前日の 3 月 23 日（金）
の午後は事前受付を行った。3 月 29 日（金）
には、2 コースによるエクスカージョンが行
われた。

午前がキートーク（招待講演）を含めた全
体セッション、午後は複数の会場での分科会
という構成。初日の 24 日（土）の冒頭で開
会式。25 日（日）、26 日（月）、28 日（水）
には、最初に、エネジャイザー（Energizer）
というウォーミングアップタイムが設定さ
れ、参加者の目覚ましと交流の時間となった。

なお、初日の午後は全体セッションで、さ
らに IAU100 周年をテーマとした特別セッ
ションも企画された。この機会に「IAU と
して何ができるか?」と、8 人が登壇した「暗
い夜空」「天文教育」「観望会」などをテ
ーマに展望を語り、パネルディスカッションが
行われた。

表 3 の分科会の欄の括弧の数字は分科会

表 3 CAP2018 プログラム概要

	3 月 24 日 (土)	3 月 25 日 (日)	3 月 26 日 (月)	3 月 27 日 (火)	3 月 28 日 (水)
午前	開会式	エナジャイザー	エナジャイザー	ワークショップ	エナジャイザー
	招待講演 1	招待講演 2、3	招待講演 4		招待講演 5
	全体セッション	全体セッション	全体セッション		全体セッション
	昼食				
午後	全体セッション	分科会 (4)	分科会 (5)	ワークショップ	分科会 (4)
	スペシャル セッション IAU100 周年				アンコンファ レンス
					閉会式
		ウェルカム イベント		カンファレン スディナー	

の数を示す。通常は、サイエンスホールと 3 つの実験室、合わせて 4 会場で行い、3 日目は、さらにプラネタリウムドームでドームセッション、計 5 会場で行った。

ワークショップは、CAP2016 では午後の後半の時間が充てられたが、CAP2018 では 4 日目の 27 日(火)にまる 1 日充てられた。6 会場パラレルで 20 のワークショップが実施された。この際、サイエンスホールを 3 会場に分けた。午後の後半で 4 つのワークショップがアンコールで実施され、のべ 24 のワークショップが実施された。

最終日の午後にはアンコンファレンス (Unconference) というセッションが行われた。これは、参加者が議論したいテーマを自由に提案して、議論するものである。投票の結果、「天文遺産」「IAU100 年」「ウィキペディア」「SKA と VLBI ネットワーク」の 4 つのテーマでディスカッションがなされた。そして、最後に閉会式を迎えた。

5. 発表数について

5.1 日本からの発表者数

2 章で参加者数についてコメントしたが、ここでは発表者数について言及する(表 4)。なお、同一人物が別の発表をしても、個別にカウントしている。また、日本人に限らず、日本の機関に所属しているものは日本とカウントした。

全発表件数 281 件のうち、日本からの発表者数は 85 人で、これは全体の 30.2%にあたる。発表種類別に見てみ概ね 20~40%の間である。これは、今回の CAP2018 では、日本での開催の利を活かして、日本の天文コミュニケーションのプレゼンスを強く示せたものと分析する。ただし、口頭発表が 24.1%に対して、ポスターが 39.6%と、口頭より高くなっているのは、レフェリー結果も

あるのではっきりとは言えないが、英語での発表を苦手と感じて、ポスターの割合が高くなったとも言えるし、ポスター発表によるコミュニケーションを積極的に選んだとも言える。この点については、今後国際的な場での発表を推進する上で、詳細な分析が必要である。なお、口頭発表は当初 395 件の申し込みがあり、審査の結果、170 件が採択された。

表 4 CAP2018 の発表者数内訳

	海外	日本	合計	日本の割合
招待講演	3	2	5	40.0%
全体セッション	19	5	24	20.8%
分科会	107	34	141	24.1%
口頭発表の合計	129	41	170	24.1%
ワークショップ	16	4	20	20.0%
ポスター	67	44	111	39.6%
全合計	196	85	281	30.2%

5.2 発表テーマの傾向

3 章で、6 つのサブテーマについて紹介した。分科会はこのサブテーマに沿って編成されている。全体セッションと分科会での、サブテーマ別の発表の傾向を表 5 に示す。ポスター発表については、時間の都合で調査できなかった。全体セッションの発表は、筆者で判断して分類した。必ずしもセッションのテーマと発表内容が一致してない場合もある。その上で、テーマの傾向をコメントする。

表 5 サブテーマごとの発表者数内訳

サブテーマ	海外	日本	合計	日本からの割合
天文コミュニケーションの課題	15	5	20	25.0%
天文コミュニケーションの実践例	58	25	83	30.1%
障がい者とマイノリティと共に楽しむ天文学	6	0	6	0.0%
よりよい世界を目指す天文コミュニケーション	15	0	15	0.0%
天文コミュニケーションのメディアの役割	9	1	10	10.0%
マルチメディア・SNS・没入体験	18	5	23	21.7%
その他	6	0	6	0.0%

全体的に「天文コミュニケーションの課題」「天文コミュニケーションの実践例」「マルチメディア・SNS・没入体験」に関する発表が多い。「障がい者とマイノリティと共に楽しむ天文学」は、実践例こそよく聞くものの、今回の発表者数は少なく感じた。「よりよい世界を目指す天文コミュニケーション」の日本人の発表者が0というのも気になった。ただ、「天文コミュニケーションの課題」と重複するテーマでもあるので、そちらにカウントされた可能性もある。また、「天文コミュニケーションの実践例」については、実際のセッションでは、さらに「アート」「プラネタリウム等の施設」「シチズンサイエンス」「学校教育との連携」など、さらに細かいテーマに分かれていたが、本稿ではその内訳まで分析しなかった。

6. 最後に

今回、CAP2018の参加者数・発表者数・プログラムの面から総括を試みた。過去最大の参加国数・参加者数であると同時に、日本国内からも200名近い参加者があり、英語による発表などさまざまなハンデにもかかわらず、口頭・ポスター・ワークショップなどで積極的な発表がなされたことは大きな

経験である。今後、類似の国際会議に参加・発表をする呼び水になれば幸いである

文 献

- [1] 矢治健太郎, 2018, 「世界が福岡にやってきた！～速報!世界天文コミュニケーション会議 2018～」, 天文教育, 30:3, p10-15
- [2] 縣秀彦, 2018, 「史上最大の天文系科学コミュニケーション会議を終えて」, 国立天文台ニュース, 298, p3

矢治 健太郎